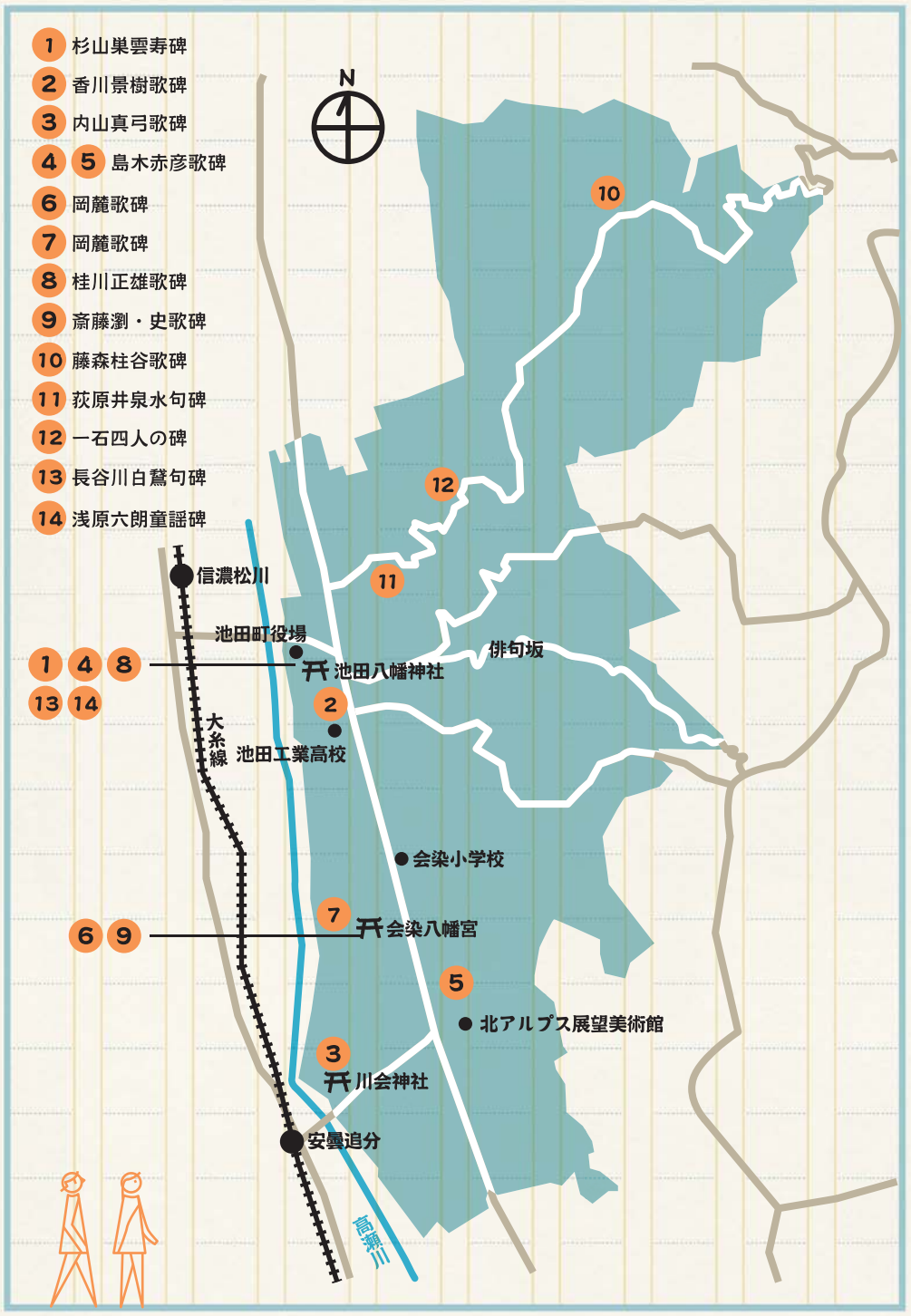
池田町と文学

池田町には、短歌や俳句などの文学碑が20数基あり、比較的多いとされています。

短歌の歴史については、はっきりしないところもありますが、江戸時代後期に杉山巣雲を師として始まった池田学問所での学びの影響が大きかったといえます。特に、学問所で学んだ内山真弓が京都へ出て、有名な香川景樹の門人となって短歌を学び、巣雲亡き後は、学問所の師となり教育にあたったことも短歌がこの地に広まるもとをつくったといわれています。明治以降も欧米文化の影響を受けながらも、伝統的な短歌が人々のあいだに根付いていきました。文人の藤森桂谷が広津北山小学校へ赴任してきたことや、アララギ派の歌人の島木赤彦が池田尋常高等小学校へ赴任し情熱的な教育をするとともに、近隣の青年を集めて歌会を開くなどしたことが、この地域における作歌の気風を高めたと考えられます。また、明治末期から大正にかけて、北安曇郡内に短歌愛好グループが生まれ、桂川正雄(雨山)などが活動を盛んにしたことが、影響しているとも考えられています。昭和20年(1945)には戦禍を避けて、アララギ派の中心人物であった岡麓が内鎌地区に疎開して、近郷の歌会の指導にあたりました。また同じ頃、佐々木信綱の門人である齋藤瀏も池田に疎開し、作歌の指導にあたるなどして地域住民の文学的素養を高めました。

俳句の歴史もはっきりはしていませんが、明治のはじめ頃、俳人の長谷川白鵞が愛知県から旅をして来ていて池田で生涯を終えており、その間ここを中心に社・常盤(現大町市)、有明・穂高(現安曇野市)、七貫・陸郷(現池田町・生坂村、安曇野市明科)などで俳句の会を開き、俳句を広めました。白鵞の弟子に、勝山三洞・市川一管・中山古石・勝山亀友などがいます。また、東京で活躍しながらも、父親が中島地区出身ということから、この地と縁の深かった荻原井泉水の句碑が中島集落基幹センター東にあります。

小説家・詩人・俳人であり、童謡「てるてる坊主」の作詞者である浅原六朗も池田の生まれで、その碑が池田八幡神社境内や俳句坂にあります。

このように、江戸・明治・大正・昭和の各時代に名をなした多くの人々が、池田町各地の文学碑にその名をとどめています。